

Title	副腎嚢腫の1例
Author(s)	諸角, 誠人; 高橋, 茂喜; 宮崎, 尚文; 川地, 義雄; 引地, 功侃; 小川, 由英; 北川, 龍一
Citation	泌尿器科紀要 (1984), 30(7): 907-911
Issue Date	1984-07
URL	http://hdl.handle.net/2433/118228
Right	
Type	Departmental Bulletin Paper
Textversion	publisher

副腎囊腫の1例

順天堂大学医学部泌尿器科学教室（主任：北川龍一教授）
 諸角 誠人・高橋 茂喜・宮崎 尚文・川地 義雄
 引地 功侃・小川 由英・北川 龍一

ADRENAL CYST: REPORT OF A CASE

Makoto MOROZUMI, Shigeki TAKAHASHI, Naofumi MIYAZAKI, Yoshio KAWACHI,
 Yoshinao HIKICHI, Yoshihide OGAWA and Ryuichi KITAGAWA

*From the Department of Urology, Juntendo University School of Medicine
 (Director: Prof. R. Kitagawa, M.D.)*

This is a case report of an adrenal cyst which developed in a 36-year-old man. The patient experienced sudden abdominal pain, accompanied by sweating. The diagnosis was established by ultrasound-sonography and CT-scan. The adrenal cyst was removed surgically; it measured 20×10×10 cm and contained 1,900 ml of a white, cloudy fluid. Histological examination showed that the cyst wall was lined with mesothelial cells and was of congenital origin. The cyst was endocrinologically non-functioning, for all the endocrinological data were within normal limits. After surgery, however, hypertension has persisted and has been diagnosed as being essential in origin. This is the 63rd case reported in the Japanese literature.

Key words: Congenital adrenal cyst, Non-functioning, Diagnosis, Treatment

緒言

副腎囊腫はまれな疾患であり、囊腫が大きくなるまでは臨床症状を呈しがたいことよりその報告も少ない。しかし、最近では超音波検査、CT スキャンなどにより偶然発見される機会も少なくない。副腎囊腫の成因としては、出血などによる偽囊腫が多く報告されている¹⁾。今回われわれは、腹痛を主訴とした先天性副腎停滞性囊腫の1例を経験したので報告し、本邦文献より副腎囊腫63例を集計したので若干の考察を加えた。

症例

患者：36歳，男子，会社員
 主訴：腹痛
 家族歴：両親ともに高血圧
 既往歴：15歳扁桃腺摘出術，31歳より本態性高血圧症として治療
 現病歴：1982年9月中旬，突然腹痛，冷汗が出現し，

近医を受診。腹部単純撮影などにて右上腹部腫瘍が認められ，同時に高血圧を指摘され精査目的にて某病院に入院した。右副腎腫瘍が疑われ，1982年10月18日当科入院。

現症：身長 162 cm，体重 72 kg，体格中等，中等度肥満。血圧 198/138 mmHg，脈拍72/分整，右上腹部に 10×10 cm の腫瘍を触知，表面平滑，弾性軟可動性なく，圧痛なし。その他理学的所見に異常は認めなかった。

入院時検査成績：血算；白血球数 $6.6 \times 10^3/\mu\text{l}$ ，赤血球数 $5.06 \times 10^6/\mu\text{l}$ ，Hb 15.4 g/dl，Ht 47.4% 血小板数 $188 \times 10^3/\mu\text{l}$ ，GOT 25，GPT 12，LDH 350，ALP 6.2，総ビリルビン 0.4 mg/dl，総タンパク 7.0 g/dl，アルブミン 4.5 g/dl，BUN 15 mg/dl，クレアチニン 1.3 mg/dl，空腹時血糖 94 mg/dl，Na 145 mEq/l K 4.3 mEq/l，Cl 107 mEq/l，血沈 6 mm/hr，CRP (±)，尿検査；尿蛋白 (－)，尿糖 (－)，尿沈渣，赤血球 1～5/hpf，白血球 1～5/hpf，円柱 (－)，細菌 (－) 内分泌学的検査；血漿レニン活性 1.7 ng/ml/hr，

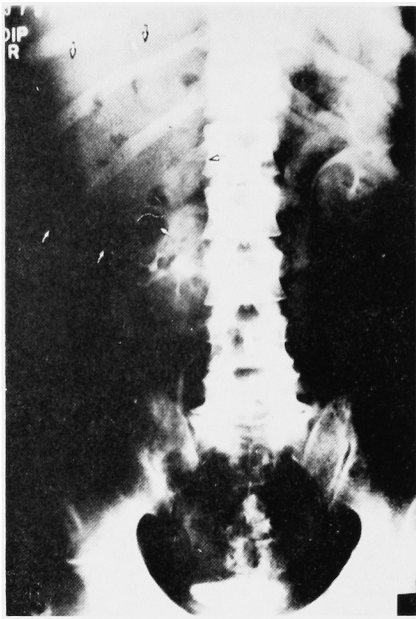


Fig. 1. DIP showed that the right kidney was displaced medially and downward

コーチゾル $5.5 \mu\text{g/dl}$, アルドステロン 125 pg/ml , アドレナリン $9.6 \mu\text{g/l}$, ノルアドレナリン $46.5 \mu\text{g/l}$
 尿中 17-KS 5.0 mg/day , 17-OHCS 6.6 mg/day , VMA 7.8 mg/day , HVA 2.5 mg/day 5-HIAA 2.8 mg/day , アドレナリン $5.4 \mu\text{g/day}$, ノルアドレナリン $80.9 \mu\text{g/day}$, ドーパミン $484.9 \mu\text{g/day}$ レ線検査など: 右上腹部に $20 \times 15 \text{ cm}$ の腫瘤陰影を認め, DIP にて右腎は下方に圧排されていた (Fig. 1). 超音波および CT スキャンにて均質な球状の囊腫様陰影を示した (Fig. 2). 血管造影にて囊腫は副腎動脈の支配を受けており, その伸展を認めたが悪性腫瘍を示唆する所見は認められなかった (Fig. 3). 副腎シンチで右副腎は描出されなかった.

臨床経過 以上の諸検査より内分泌学的に非活性な右副腎囊腫と診断し 1982 年 11 月 12 日手術を施行した. 手術は右腰部斜切開にて後腹膜腔に到達した. 囊腫により右腎上極は内下方へ圧排されていた (Fig. 4). 囊腫は薄い被膜よりなり, 腎および周囲組織との剥離は容易であった. 副腎組織は囊腫に連続性に付着していたため副腎の一部を含め囊腫を摘出した. 術後経過は良好であったが高血圧は持続した. 血中および尿中のホルモン値は正常で術前と変化なく, 現在外来で降圧剤投与にて経過観察中である.

病理: 腫瘍は軽度白濁した内容液 $1,900 \text{ ml}$ を含む $20 \times 10 \times 10 \text{ cm}$ の囊腫であった. 囊腫壁は紙様菲薄であり, 副腎組織は囊腫に連続性であった. 囊腫壁の内

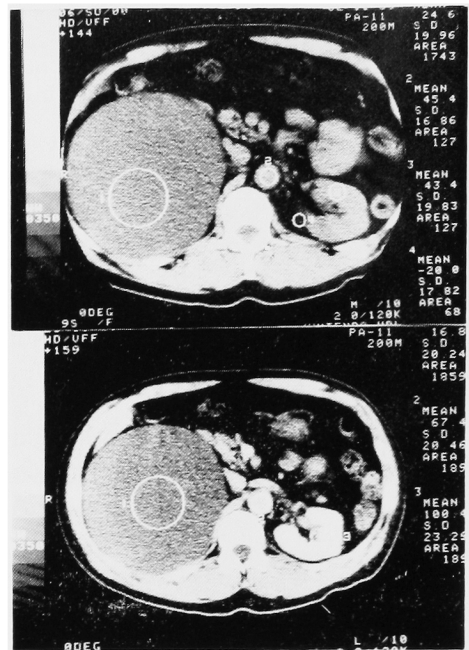


Fig. 2. CT-scan (upper) revealed a huge round mass of water density on the right kidney. Enhanced CT-scan (lower) showed that the shadow was not enhanced in density by the contrast media

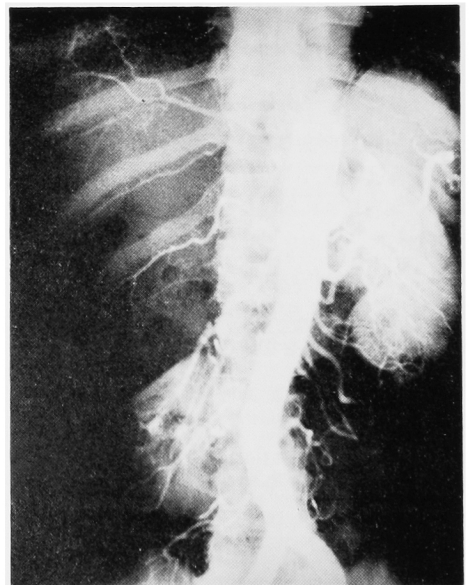


Fig. 3. Angiography showed that the mass was avascular and had a stretched vascular supply from the adrenal artery

腔側には1層から3層の類円形ないしは立方形の細胞が認められ、それらは中皮細胞由来と考えられ、先天性停滞性嚢腫と診断した (Fig. 5).

考 察

本邦63例を検討した結果 (Table 1), 診断時年齢をみると最年少1カ月¹⁰⁾から最年長73歳¹⁹⁾まで平均44.7歳であった. 性別では男子25例, 女子38例で女子に多く Abeshouse ら¹⁾の1/3と女子に多い報告と一致していた. 患側は不明1例を除き全例片側性で右側23例, 左側39例と左側に多くみられた. 本邦報告例中23例で内容量が計測され, 19²⁰⁾~4,210⁴⁾ ml 平均1,277 ml であった. また, 重量で測定された23例は, 9.2²¹⁾~2,500²²⁾ g 平均 518 g であった. Foster ら²³⁾のあ

げた三主徴に準じて本邦63例を検討すると, 患部鈍痛19例 (30%), 胃腸症状9例 (14%), 腫瘤触知10例 (16%) となりこの疾患に特徴的なものはなかった. 従来より副腎嚢腫は腫大した結果, 触診および手術時に発見されるものも少なくなかったが, 最近では超音波検査などの診断技術の進歩²⁴⁾にともない嚢腫が発見される機会もふえてきている. また, 超音波およびCT スキャンは実質性腫瘍との鑑別診断上欠くことのできないものとなっている.

Abeshouse らの分類にしたがい本邦63例を検討すると偽嚢腫35例, 内皮性嚢腫13例, 停滞性嚢腫7例, 嚢腫性腺腫1例, 不明7例となる. 発生学上副腎皮質は中胚葉由来であり, 胎児副腎皮質は体腔上皮由来である. 本症例は嚢腫壁内腔に1層から3層の中皮細胞



Fig. 4. The gross appearance of the adrenal cyst at the time of surgery

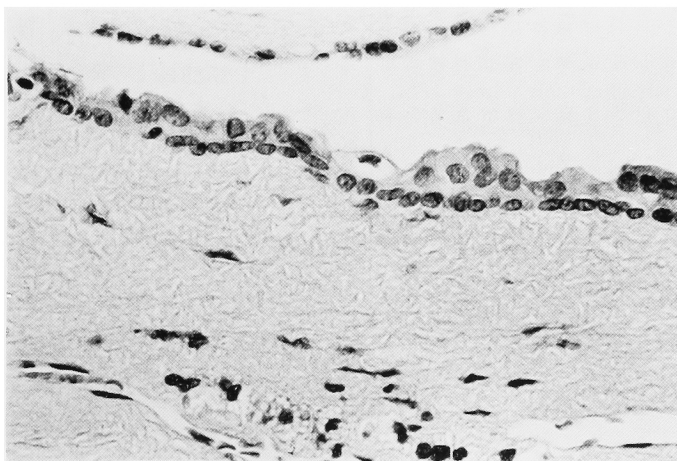


Fig. 5. The microscopic appearance of the wall of the adrenal cyst. The inner surface of the wall was covered with from one to 3 layers of round or cuboidal cells of mesothelial origin.

Table 1. 本邦副腎嚢腫症例 (宇都宮・ほか²⁾ (1982) 報告以後のもの)

No.	報告者	発症	年齢	性別	主訴	患側	病理診断	計測値
47	公平 ²⁾	'69	62	男	頭痛, 血尿	左	漿液性あるいはリンパ管腫性嚢腫	13×12×10cm, 2,500ml
48	遠藤 ³⁾	'77	31	女	上腹部腫瘍	左	リンパ管腫性嚢腫	4,210ml
49	石塚 ³⁾	'80	41	女	排尿困難	右	嚢腫 + 神経芽細胞腫	
50	三橋 ³⁾	◇	8Mo	男	腹部腫瘍, 発熱, 貧血	右	嚢腫	
51	加治木 ⁷⁾	'81	67	女	高血圧	左	嚢腫	6 cm
52	藤沢 ⁸⁾	◇	41	女	IV.P.にて嚢腫	右	上皮性嚢腫	7×6×6cm, 90g
53	片田 ⁹⁾	◇	42	女	左季肋部痛	左	リンパ管腫性嚢腫	
54	林 ¹⁰⁾	◇	1Mo	男	左上腹部腫瘍	左	多発性嚢腫	
55	伊藤 ¹¹⁾	◇	49	男	腹部腫瘍	左	副腎皮質嚢腫	
56	木内 ¹²⁾	'82	30	女	左腎上方の石灰化陰影	左	リンパ管腫性嚢腫	直径 4 cm
57	内田 ¹³⁾	◇	32	女	右上腹部痛, 嘔吐	右	出血性偽嚢腫	22×15×15cm
58	浜田 ¹⁴⁾	◇	65	男	右半身脱力発作	右	副腎皮質嚢腫	直径 3.5cm
59	中村 ¹⁵⁾	◇	56	女	心窩部痛	右	Parenchymal cyst	16×10×8cm, 650g, 600ml
60	吉岡 ¹⁶⁾	◇	59	女	高血圧, 血尿	右	嚢腫 + 褐色細胞腫	4×3.2×4.6cm, 60g
61	永田 ¹⁷⁾	◇	29	男	左季肋部痛	左	嚢腫	5 × 5 cm
62	高橋 ¹⁸⁾	◇	27	男	動悸発作, 四肢脱力感, 気分不快	左	嚢腫 + 褐色細胞腫	20×10×10cm, 1,900ml
63	自験例	'83	36	男	腰痛	右	停滞性嚢腫	

Table 2. Contents of the cyst

内容液:

Na 153mEq/ℓ K 5 mEq/ℓ Cl 96mEq/ℓ
 UreaN 15mg/dℓ Amylase 60単位/ℓ
 Uric-Acid 4.0mg/dℓ P 0.1mg/dℓ Ca 4.5mEq/ℓ
 CRTN 0.9mg/dℓ CRT 1.5mg/dℓ
 Adrenalin 0.14ng/ml NA 0.13ng/ml
 17-KS 0.1mg/ℓ 17-OHCS 1.4mg/ℓ
 VMA 1.0ng/ml以下

由来と考えられる細胞が認められたことより先天性停滞性嚢腫と考えた。

Jakobi ら²⁵⁾ は副腎嚢腫内のホルモン活性は周囲組織からの受動的拡散により決定されることを示した。本症例の嚢腫内容液の分析結果は Table 2 のごとくであり、アドレナリン、ノルアドレナリン、17-KS、17-OHCS は血清あるいは尿に比し、いちじるしく低値を示した。本邦では自験例を含め 5 例が内容液の内分泌学的検討を加えている。仲田ら²⁶⁾ はリンパ管腫性嚢腫で 17-OHCS、17-KS、estrogen、宇都宮ら²⁾ は出血性偽嚢腫で cortisol、aldosterone、木内ら¹²⁾ はリンパ管腫性嚢腫で cortisol、aldosterone、藤沢ら⁹⁾ は上皮性嚢腫で cortisol、catecholamine が血清に比し、高値であったと報告している。この 5 症例について病理組織学的診断と内分泌学的検索の間に関連性は認められない。しかし、今後血清、内容液、隣接副腎組織の内分泌学的検索をおこない、病理組織学的診断とあわせて関連性を検討する必要があると考えられる。

本邦報告例のうち、神経芽細胞腫にともなった 1 例⁹⁾ を除き全例良性であり、とくに症状がなければ副腎嚢腫に対する手術適応はあまりない。しかし、嚢腫による圧迫症状が出現したり、CT や血管造影などによっても悪性腫瘍との鑑別が困難な場合には試験開腹が必要である。

総じて術後経過は良好である。本邦 63 例中 20 例に高血圧がみられたが、術後改善したものは 5 例、改善しなかったもの 6 例、不明 9 例であり、高血圧と本症との因果関係は不明な場合が多かった。

結 語

腹痛を主訴とした 36 歳、男子、ホルモン非活性先天性副腎停滞性嚢腫の 1 例を報告した。Abeshouse らの分類にしたがって本邦報告 63 例を集計し、若干の文献的考察をおこなった。

本論文の主旨は、第 415 回日本泌尿器科学会東京地方会において発表した。

文 献

- 1) Abeshouse GA, Goldstein RB and Abeshouse BS: Adrenal cysts: Review of the literature and report of three cases. J Urol **81**: 711~719, 1959
- 2) 宇都宮正登・奥山明彦・松田 稔・友渕 基・高光義博：副腎嚢腫の1例。泌尿紀要 **28**: 183~190, 1982
- 3) Kohdaira T, Kurotsuchi M and Hosaka M: Two cases of adrenal cyst. Yokohama Med Bull: 43~54, 1973
- 4) 遠藤尚孝・橋本昌武・大槻 弘：巨大副腎嚢腫の1手術治験例。函医誌 **1**: 73~76, 1977
- 5) 石塚 仁・菅原 啓・平田 徹・芹沢 健・成井貴・依田敏行・後藤由夫：副腎嚢腫の一治験例。臨床と研究 **57**: 173~177, 1980
- 6) 三橋将人・富澤 滋・黒梅恭芳・平敷淳子・松山四郎・渡部岩吉：巨大な副腎嚢腫を呈した神経芽細胞腫の1例。小児科臨床 **33**: 271~275, 1980
- 7) 加治木邦彦・陣 英輝・伊東隆碩・中条政敬：副腎嚢腫の1例。西日泌尿 **43**: 194, 1981
- 8) 藤沢 真・宮田昌伸・久島貞一・稲田文衛・黒田一秀：副腎嚢腫の1例。日泌尿会誌 **72**: 1107, 1981
- 9) 片田直幸・加藤活大・高山哲夫・西村大作・柴田時宗・武市政之・妹尾知己・神崎正紀：脾嚢胞が疑われた左副腎嚢腫の1例。日内会誌 **70**: 112, 1981
- 10) 林 雅造・石川稔晃・田中孝二・柳井映二・小西豊・竹本正幸・島野尚志・西野正弘・黒木輝夫・大内 徹・藤原 徹・小林 裕：Beckwith-Wiedemann 症候患児にみられた左副腎多発性の嚢腫の1例。日小児外会誌 **17**: 153, 1981
- 11) 伊藤秀彦・山根哲美・高橋修一・三好志雄・飯田さよみ・伊藤芳晴・森脇 要・垂井清一郎・川田博昭・橋本 創・宮田正彦・中尾量保：巨大嚢腫を合併する内分泌非活性副腎皮質腺腫の一例。日内泌会誌 **57**: 1362, 1981
- 12) 木内利明・藤岡秀樹・高羽 津・綿谷真理・暁千津子：副腎嚢腫の1例。泌尿紀要 **28**: 1133~1139, 1982
- 13) 内田道男・岩佐 裕・根本浩介：出血性副腎偽嚢胞の1手術例。臨外 **37**: 1003~1006, 1982
- 14) 浜田和一郎・福井耕三：副腎嚢腫の1例。日泌尿会誌 **73**: 1356, 1982
- 15) 中村 薫・建野正毅・佐々木哲二・矢倉 滉・王鉄城・伊藤秀夫：巨大な嚢腫を呈した副腎褐色細胞腫の1例。日臨床外会誌 **43**: 335, 1982
- 16) 吉岡光明・筒井理裕・斉藤昭夫・武部和夫・山本実・竹下 元・西沢 一・工藤 一：副腎嚢腫の1例と本邦集計37例の臨床像。日内会誌 **71**: 1647, 1982
- 17) 永田進一・陳 英輝・山下政紀：副腎仮性嚢腫の1例。西日泌尿 **44**: 349, 1982
- 18) 高橋 晶・久保善明・川村光信・林 洋・松島照彦・宮崎 滋・片岡亮平・内藤周幸：嚢腫を形成した副腎褐色細胞腫の1例。日内会誌 **71**: 1474, 1982
- 19) 仲松 栄・外間 章・又吉正哲・正義之：副腎嚢腫の一治験例。日臨床外会誌 **38**: 697, 1977
- 20) 佐々木常雄・金子昌生・佐藤信泰・伊藤麻爾：副腎嚢腫の1例について。日医放会誌 **28**: 107, 1968
- 21) 上田昭一・高野信一：石灰化を伴った副腎嚢腫の1例。西日泌尿 **33**: 658~661, 1971
- 22) 中村 達・飛鋪修二・斉藤英夫・小林武夫・菅家透・野本信之助・梅園 明：副腎嚢腫の1治験例。癌の臨床 **24**: 848~852, 1978
- 23) Foster DG: Adrenal cysts. Review of literature and report of case. Arch Surg **92**: 131~143, 1966
- 24) Morley P: Ultrasound in the investigation of the adrenal glands and the kidneys. Neth J Med **19**: 74~84, 1976
- 25) Jacobi JD, Carballeira A and Fishman LM: Adrenal cysts: Hormonal contents and functional evaluation. Acta Endocr (Kbh) **88**: 347~353, 1978
- 26) 仲田浄治郎・町田豊平・増田富士男・三木 誠・大石幸彦・赤阪雄一郎・小寺重行・近藤直弥・高橋知宏・城 謙輔・藍沢茂雄：巨大副腎嚢腫の1例。泌尿紀要 **27**: 157~162, 1981

(1984年1月26日受付)